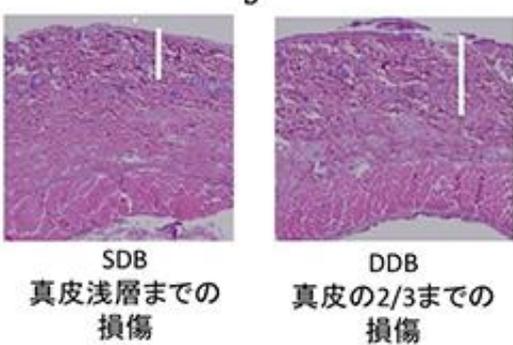


	シリーズ名	熱傷における新たな評価デバイスの確立
	所属・役職・氏名	形成外科学・助教・羽多野 隆治 (HATANO, Takaharu)
<p><b>&lt;要旨&gt;</b>  近年、培養表皮などの様々な医療技術の改善に伴い全身熱傷患者の救命率は改善してきている。ところが、高齢者に限ってみると、救命率はまだ低いままである。その一因として、経験則に頼らざるを得ない輸液管理の難しさがあると考えられる。また、救命率向上に伴い、熱傷後瘢痕に悩む患者も増加している。そこで我々は、新たな熱傷深達度の指標を開発すべく、まずラット熱傷モデルを作成し、それぞれの熱傷深度において角質水分量や経皮水分蒸散量等を計測し、分析する。最終的には、正確な熱傷深度および瘢痕化の予想が可能となると考える。</p> <p><b>&lt;研究シリーズ説明&gt;</b>  右図のように、熱傷モデルの作成についてはすでに研究を行い、発表を行っている。それらについて、体表からの皮膚の評価と病理学的所見との一致性について、研究を行いその結果をもとに信頼できるデバイスの検討を行う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>ラット熱傷モデル</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>真皮浅層までの損傷      真皮の2/3までの損傷</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">A:ラット熱傷モデル      B:作成した熱傷モデルの病理組織学的評価</p> <p><b>&lt;アピールポイント&gt;</b>  今までは経験則に頼ることの多かった輸液管理において、新たな評価項目を加えることでより正確性を向上させることが可能ではないかと考えている。また、客観的に評価することが困難であった熱傷後の瘢痕に関しても、最新のデバイスを用いて評価し、患者の訴えとの相関性を検討する。</p> <p><b>&lt;利用・用途・応用分野&gt;</b>  損傷深達度および瘢痕の評価として、他の外傷にも使用できる可能性がある。</p> <p><b>&lt;関連する知的財産権・引用文献・学会発表など&gt;</b>  羽多野隆治, 小澤俊幸, 森本訓行, 他: ラット熱傷モデルでのレーザースペックル画像血流計による熱傷深達度の評価. 創傷 5 : 16-21. 2014</p> <p><b>&lt;関連するURL&gt;</b>  <a href="http://www.med.osaka-cu.ac.jp/PRsurgery/">http://www.med.osaka-cu.ac.jp/PRsurgery/</a>  <a href="http://kaken.nii.ac.jp/d/r/10382144.ja.html">http://kaken.nii.ac.jp/d/r/10382144.ja.html</a></p> <p><b>&lt;他分野に求めるニーズ&gt;</b>  熱傷深度や血流等を非侵襲的に評価できるデバイス</p>		
キーワード	熱傷、皮膚、血流、瘢痕	